

転校生なギャルJKはダークエルフ！？ 3章終幕

癒し庵もち猫 クアトロ

13.終幕

結構登ってきたが、どこまで行く気だろう？
空はすっかり暗くなってしまっている。
などと考えを巡らせていると、どうやら到着したらしい。

ナナリー「いやー、流石にスイーツ食い過ぎたからさー、いい運動になったわ♪」

確かにまだ食べるのか、というくらいスイーツを頬張っていた。
ふと視界に街の光が入り、横に目をやると、そこからは街全体が見渡せた。

ナナリー「ここに来るとさ、妙に落ち着くつつか、考えがまとまるつつか。」

どうやらナナリーのお気に入りの場所らしい。

聴き手 「確かに眺めはいいけど、これを見せたくて来たの？」

どうやらその通りらしい。

ナナリー「あっちが学校で、そっちが昼間に行った映画館。どう？綺麗つしょ？」

聴き手「うん。」

ナナリー「でっしょー♪しかもここさ、人が来ないから静かなんだわ。」

嫌な予感がした。
ナナリーに促され、近くのベンチに腰掛けた
丘を登り荒くなった息を静かに整える。

ナナリー「いやー、今日はあんがとな♪スゲエ楽しかったわー♪」

確かに楽しそうに笑っていた。
それを見て可愛いとも思った。
しかし胸のざわつきがその記憶の邪魔をしてくる。

ナナリー「今日一日で、この街全部を満喫しちまった気分だわ♪」

そんな事を言うためにここまで来たのだろうか？
午後からあの事について、ほとんど口にしていない。
そこで僕は軽くジャブを見舞った。

聴き手 「ねえナナリー、調査の事、忘れてない？」

が、これはどうやら失敗だった様だ。
ナナリーの表情が僅かに引きつったかと思うと、瞬く間に修羅の様な表情へと変貌した。

ナナリー「まっさかー、忘れるワケねえじゃん…“人間”。」

嫌な予感は的中した。

ナナリー「いや、ここはもう“天使族”って言っちゃった方がいいのかなー、ええ？」

聴き手 「...。」

ナナリー「あんたさ、玉ねぎが嫌いっていうの、嘘でしょ。
シラばっくれても無駄。
あれはあんたが悪魔なんじゃねえかって思わせるためのミスリード。
違う？」

聴き手 「...。」

ナナリー「どうした、返事も出来ねえか？」

聴き手 「面白い推論だね。仮にそうだとして、根拠は？」

ナナリー「根拠なら昨日のオムライス。」
あんたは玉ねぎ抜きでって言った。
けどさ、実はめっちゃ細かく刻んで入れてあったんだわ。
それを食べたのに、なんの異変もなかった。
もし悪魔なら、拒絶反応が出てもおかしくねえって所で平然としてた。」

思わず足に力が入り、地面の砂利が嫌な音を立てた。

ナナリー「おっと、動くんじゃねえ。」

もし動いてみろ。

この展望台ごと吹っ飛ばすぞ。」

おそらく本気だ。

ナナリー「実はそれだけじゃねえ。」

あんたが人間じゃねえって事も、登校初日に気付いてたんだわ。」

マズい。

ナナリーは想像以上に頭の切れる子だったようだ。

相手の出方を伺う様に、問いかけた。

聴き手 「人間じゃないなんて、心外だな。どうしてそう思ったのさ？」

ナナリー「そんなの簡単じゃん。」

ナナっちの闇魔法が効かなかつたって時点で、可能性はかなり絞られるって

気付かねえ？」

ナナリーの言っている事はほぼ正しかった。

ナナリー「そっからは消去法よ。」

先ずあんたの身体を調べた。

もしオークやドワーフなら、もっとガッチリした身体のはず。

僕がオーク？ドワーフ？馬鹿馬鹿しい。

ナナリー「次にエルフなんじゃねえかって疑つた。」

もし普通のエルフならナナっちと同じで、耳が弱点。

けどあんたは、耳に触っても、耳かきまでしても動じなかった。」

参ったな。

そこまで考えていたなんて。

ナナリー「そこで分かつちゃつたんだよね。」

7つの種族の内、最高位にあたる、“天使族”だってね。

それならすべて辻褄が合う。

高等魔法の使い手、天使なら、闇魔法が効かなくても不思議じゃねえ。」

僕が黙っているのをいい事に、ナナリーはまくし立てた。

ナナリー「それにダークエルフを見てもまったく動じねえのは、見慣れてる....。

いや、見下してるって言った方が正しいか？

なあ天使様よ？

ダークエルフごときが偉そうに指図する様は、さぞ癪に障つただろうなあ？

ああ？

なんだあ？

図星で言葉も出ねえって感じだなあ？」

よく喋る子だな。

ナナリー「ははっ！

まさかこんな所で、天使様に会うとはなあっ！

生きてる内にいつか交えてみてえとは思ってたけど、まさか人間界で....。

まったく...森を追放されて、どうなるかヒヤヒヤしてたけど、

こりゃ状況がひっくり返んぞ。」

何を言っているんだ？

不思議そうな顔でナナリーを見据えた。

ナナリー「分かんねえのかよ、天使様。

あんたをとつ捕まえて、森に持ち帰んのさ。

そうすりや赦されて....。

いやあ？

種族の幹部入りも約束されたようなもんだ♪

あははっ♪

こりゃ愉快だわ♪

追放され、この世界での生活を準備して、

いざ溶け込もうとした初日にあんたに会った。

こんなの運命っしょっ？」

そうか。やはり一筋縄ではいかないようだ。

聴き手 「ナナリー。君は種族間の共存について可能性を感じているって言ったよね？」

ナナリー「あはっ♪そういうやそんな話もしたなあ？」

そんなの建前に決まってんじゃん♪

言ったろ？

あんたが人間じゃねえって分かった上での、演技だったってワケ。

なのにあんたってば、目をキラキラさせて聞いてんの。

超ウケる♪

先に言っておくわ。

そんな理想郷、存在しねえ。

もし信じてんなら諦めな。」

あれが演技だったのか？

ナナリー「ふふっ♪どうした？」

なにか言いたそうじゃん？」

ここまでか。

ナナリーにならすべてを打ち明けてもいいかな...。

僕の事を好きと言ってくれたんだ、賭けてみるか...。

聴き手 「僕の事を好きって言ってくれたのも演技だったのか？」

ナナリー「つたりめえじゃん。ぜーんぶ演技だよ。」

やはりジャブは効かないか。

それならこれでどうだ？

聴き手 「そうか。じゃあナナリー、君が森を追放された事について話そうか。」

ナナリー「は？今それ関係ある？」

聴き手 「ナナリー、君は禁域に侵入したんじゃないか？」

ナナリー「なつ.....。

た、たしかに禁域に侵入した...。

昔っから入っちゃいけねえって言われてた場所....。

なんで、それ知ってんの....。

あんたは知り得ねえはず....。

bingo。続けて畳みかける。

聴き手 「そしてとある木の実を持ち帰った。違うかな？」

ナナリー「あ...ああ...。

た...確かに木の実は持ち帰った....。」

そう言うとナナリーは、バッグから干乾びた枝豆大の実を取り出した。

ナナリー「こ、これだろ？」

聴き手 「そう。それが何よりの証拠であり、鍵なんだ。」

ナナリー「鍵...？鍵って何さ...。ただの木の実じゃねえの？」

聴き手「やっぱり何も知らずに持ち帰ったんだね。」

その木の実の名は、通称“エデン”。」

どうやら流石に効いた様だ。

ナナリーは、困惑した顔をしながら僅かに後ずさりした。

どうにか情勢を保とうと強気な姿勢は崩さないつもりらしいが、明らかに狼狽えている。

ナナリー「エデン...？それがこの木の実の名前...？」

エデンつつったら、これが知恵の実ってか？」

聴き手 「...。」

ナナリー「あはっ♪適當な事言つてんじゃねえよ！」

流石にそんなハッタリには騙されねえかんな？」

聴き手 「本当だ。それは知恵の実。所謂“禁断の果実”ってやつだよ。」

ナナリー「へ…？ガチ…？」

いや待てって。

知恵の実…つまり禁断の果実って、リンゴじゃねえの…？」

聴き手 「それには諸説あって、リンゴとは限らないんだ。」

ナナリー「へえ、都合のイイ事言つて、はぐらかすつもりか？」

信じてもらえなくとも当然だ。

この状況下、二人は敵同士と言つてもいい。

だったら納得してもらうしかないな…。

僕はポケットからスマホを取り出し、禁断の果実について検索した。

ナナリー「んだよ、こんな時にスマホ見てる場合じゃねえだろ。」

ナナリーが苛つくのも分かる。

本当にスマホを見ている場合ではないからだ。

しかし、今のナナリーにはこれを見せるのが一番早い。

該当箇所の画面をナナリーに差し出した。

ナナリー「あ？んだあこれ。」

途端にナナリーの表情が曇った

ナナリー「これ…知ってる…。

この木の実を採った時と同じ木だわ…。

なんであの時、居もしなかったあんたが知つてんの…。

怖いんだけど…。

ちょっとスマホ貸せ。」

ナナリーにスマホを奪われたが、どうやら流れが変わった様だ。

ナナリー「ええっと...。禁断の果実には諸説あり...! リンゴ、ザクロ、キャロブ...。

これだ...。

この木の実と一緒に...。」

ナナリーは手に持っている実をまじまじと見つめ、またスマホに視線を落とした。

ナナリー「キャロブは...

種の大きさや重さがほぼ均一であった事から、カラットの語源となった。

カラットは、宝石の重さや金の純度を表す単位...。」

ようやく分かってもらえた様だ。

ナナリーは僕にも聞こえるほどの音を鳴らし、息を飲んだ。

ナナリー「これ...マジ...？」

聴き手「ああ。」

ナナリー「へ、へえ... マジなんだ...。

で、でもよ、この木の実自体は、この世界でも採れんでしょう？

だったらナナっちが持ってるのが特別ってワケでもねえじゃん。」

どうやらもう少し説明が必要らしい。

聴き手「その実は禁域で採ったモノだよね？」

ナナリー「禁域...？」

ああ、確かにこれは禁域...入っちゃいけねえって所で採った...。

なんだよ...勿体ぶらずに言えよ...。」

最後の一押しだ。

聴き手「それこそが一番の問題なんだよ、ナナリー。

あの禁域はね、生命の原初なんだ。

そして君はあそこからその実を持ち帰った。

禁断の果実をね。」

ナナリー「は？あの禁域が、生命の原初...？」

ポカンとした顔をしていたと思った矢先、途端にナナリーは笑い出した。

ナナリー「ふふっ♪あはははっ♪

そんなヤベエもんが、なんであの森の、あんな陰鬱な場所にあんのさ。

冗談が下手すぎんぞ。」

仕方がない。チェックメイトだ。

聴き手 「その木はね、僕が植えたんだ。」

ナナリーの顔が豹変した。

驚いている...いや、怯えていると表した方が正しいか。

ナナリー「は...？あんたが植えた...？」

なに...言ってんの...。

ちょ...待て待て待てつ。

いや、でもここまで話聞いてっと、全部事実だった....。

って事はまさか....。

そんな....。

あんた...神直属の...大天使....。

嘘...だろ...。」

束の間、沈黙が訪れた。

先に口を開いたのはナナリーだった。

ナナリー「で、でもさ、納得いかねえ....。

生命の原初が何でダークエルフの森なのさ。」

聴き手 「元々生命の原初は、人間達のモノだ。

しかし、とある理由で他の種族の下へ移す事にした。

禁断の果実を口にしてしまった人間は愚かだからね。

そして生命の原初は、他の種族が住む領域にもあるんだ。」

ナナリー「他にもある...？」

「って事は、エルフやオーク、ドワーフの領域にもあんだけ？」

聴き手 「ああ。」

慌てた様にナナリーが続けた。

ナナリー「ちょっと待て。」

「生命の原初が、そういうつもあって堪るかよ。」

「やっぱ冗談なんじゃねえの？」

聴き手 「複数あるとは限らない。繋がっているんだ、すべて。」

ナナリー「繋がってる...？」

「それぞれの禁域が...？」

「はあ...マジかよ....。」

「眩暈がしてくんぜ....。」

「あー、ちょっと待ってくれ。」

「頭ん中、整理すっから...。」

そう言うとナナリーは考え込む様に俯いた。

再び沈黙。

一分程だろうか。

まだ困惑している、という表情でナナリーは息を吐いた。

ナナリー「ふう....。」

「んじゃあ、最後にもう一つ。」

「なんであの場所が禁域なワケ？」

「別にあの場所に立ち入ったって、問題ないっしょ？」

「種族間の均衡を保ってる...？」

「どういう意味だよ...。」

聴き手 「理由なんてない、そのままの意味さ。」

ナナリー「そのままの意味って...。

つまり、種族間の争いや生き死に、繁栄や衰退も、

全部大天使、あんたが握ってる...そういう事か？」

聴き手「ああ。」

ナナリー「はあ...参ったな....。

って事は、他の種族は全部あんたの手の上で転がされてたってか？」

するとナナリーは途端に表情を緩め、笑い始めた。

ナナリー「あは....。

あははつ。

あはははっ！」

聴き手 「何が可笑しいんだい？」

ナナリー「いやもう笑うしかねえだろ。」

静かな展望台に、ナナリーの笑い声が響いた。

ナナリー「はあー、可笑しかった。

んでー？

真実を知つちましたナナっちは、あんたに消されるってオチでオーケー？」

まだ分かってもらえないらしい。

僕は首を横に振った。

ナナリー「は？違う？

じゃあ何？ここまで話しておいて、その上で逃がすってのか？

そこまでバカじゃねえだろ、あんた。」

聴き手 「...。」

ナナリー「話した目的を聞いてんだよ！」

聴き手 「言ったはずだよ。種の共存を望んでるって。」

ナナリー「共存...？」

それを聞いたナナリーは再び勢いを取り戻したようにまくし立てた。

ナナリー「あははっ♪

まーだそんな甘ちちょろい事言つてんのかよ。

あのな、そんな考え、とっとと捨てちまいな。

そもそもだ。

あんたが大天使である以上、ナナっちは服従したりしねえ。

そっちが強要しようってんなら、こっちにも考えがあんぞ。

知りてえか？」

聴き手 「聞こうか。」

ナナリー「それはなあ...この世界のありとあらゆるモノを、

ゼーんぶダークエルフ族のモノにしちまうんだよ....。

そうすりや、この世界の技術を持ち帰る必要もねえ。

あんな陰鬱な森はおさらばってワケ。

まあここ日本って国には、「四季」つつうもんがあって、

くっそアチイ時期もあれば、くっソサミイ時期もあるらしい。

だったらこんな国、捨てちまえ。

こっちの世界は広いんだ。

島国の一つや二つ、なくても構いやしねえだろ。」

聴き手 「君にはそんな事出来ないよ。」

更にナナリーの顔が引きつる。

ナナリー「は？何つった...？」

ナナっちは...そんな事出来ねえ...？

いい加減にしろよ...おい....。

あんたに何が分かるつーんだっ！

悔しいけどダークエルフ族は...エルフ族に劣る...。

でもよ、この世界の技術が手に入ればエルフ族はおろか、

悪魔族にも匹敵する「ちから」になるかもしれないぞっ？

しかも、都合のいい事に、この世界には人間しか居ねえ。

弱く...脆い...7種族の中でも最下位の人間...。

そんな人間が滅んだ所で、誰が悲しむ？」

聴き手 「...。」

ナナリー「誰が悲しむかって聞いてんだろう！」

聴き手 「僕が悲しい。」

驚いたような顔をしてナナリーは続けた。

ナナリー「は...？なんで...。

なんで大天使であるあんたが悲しむのさ...。

人間なんてこんな下等で、弱ったら直ぐに死んじまう生き物なのに...。

どうしてそこまで肩入れするのさ...。」

聴き手 「もう何回も言っているじゃないか。共存だよ。」

ナナリー「ツ...！

そつか...あんた...本気なんだな...。

それにあんたには、種族間の均衡を維持する勤めがある....。」

するとナナリーは参りましたと言わんばかりに、両手を掲げてみせた。

ナナリー「はあ...。わーった。

わーったよ。

ナナっちの負けだ。

あんた、スゲエ冷静な顔して澄ましてつけど、内心哀しみに満ちてるっしょ。

分かるよ....。

大天使である事を隠していたとはいえ、

この三日間でそれくらいは心が読めるようになったってワケ。」

聴き手「驚いた。正解だ。」

ナナリー「ダークエルフの観察眼、舐めてもらっちゃこまるんだけど？」

それにどうせ、ナナっちがノーッつて、実際に逃げようとしたら、

大天使様お得意の高等魔法でズドンってのが見えてるわ....。

ナナっちはまだ生きてえからなー。」

聴き手「おかしな考えは払拭出来たかな？」

ナナリー「ああ、降参だ。

んでー？もうナナっちに用はねえんだろ？

この世界には何も手出ししねえ。

だからさ、さっさと逃がしてよ。

あんたが大天使と分かった今、ここに居るだけで、息があがつちまう....。

ってワケで、ナナっちは失礼すんぜー。」

聴き手「話はまだ終わってないよ。」

ナナリーは不満そうな顔でこちらを睨んでいる。

当然だ。

手出しあしない、降参したというのに呼び止められたのだから。

ナナリー「んだよ、手出ししねえつつったじゃん。

もう話す事はねえよ。」

聴き手「君が持ち去った木の実。」

ナナリー「あ？木の実？」

ああ、これ....。

これをどうすりやいいんだ？」

聴き手「それを僕に譲ってくれないか？」

ナナリー「渡す...？あんたに...？」

ナナリーは少し考えこんだ。

ナナリー「うーん...。

これが禁断の果実って聞いちまったからかな...。

なんつーか、持ってるの気マズいわ...。

だからよ、素直に渡すわ。

ほらよ。」

木の実を受け取った僕は安堵した。

“これで終わらせられる”

ナナリー「渡したから話はこれでお終いだろ？」

なあ、その木の実、どうすんの？

なあ、聞いてる？」

聴き手 「ああ、終わりにしよう。」

小ぶりな木の実を一瞥し、一つ深呼吸をする。

“そして僕は禁断の果実を齧った”

ナナリー「おい、なにしてんの？」

そんなもん口にしたらっ...。」

噛んだ瞬間、鼻孔を甘い香りが駆け抜けた。

それとは裏腹に、妙な苦さが舌全体に広がった。

これが禁断の果実の味...。

どうやら無意識の内に膝から崩れ落ちていた様だ。

うずくまる僕にナナリーが駆け寄ってきたのが分かる。

ナナリー「バカ野郎っ！早く吐き出せっ！」

このままじゃ堕天使になっちまう...。

くっそ、ヤベエ...超ヤベエ....。

おいつ、おいつてばっ！」

その時だった。

胸の鼓動が跳ね上がるのを感じた。

そうか...。これが...。

ナナリーがまだ何か言っているが、自身の鼓動で聞き取れない。

ナナリー「吐...し...か？」

どう...呼...は落...きた...だな。

焦....。

いき...木の...食つ...んだ....。

...ビビる....。」

すると“それ”は来た。

身体の内から光が漏れ出し、そして僕は“それ”を受け入れた。

ナナリー「っておい、なんか身体が光り始めたぞ....。」

大丈夫なのか...？

おいつてばっ！」

聴き手 「大丈夫...。少し飲み込んだ...だけさ....。あはは....。」

ナナリー「は？マジかよ。

バッカ...笑ってる場合じゃねえだろっ！

どうすりやいい？

なんか手はねえのか？

聴き手 「ナナリー、いいんだ。これでいい。」

ナナリー「全然よくねえよっ！」

あんたが墮天したら、その反動で魔力の暴走が起きんぞ....。

そうなったら、被害はこの街だけじゃ済まねえ....。

なあ、なんか手はねえのかって聞いてんじょんっ！」

聴き手 「大丈夫だって...。安心...して欲しい...。」

ナナリー「安心しろ...？」

出来るワケねえだろっ！

ああヤベエ...光が益々強くなつていってやがる...。

え？

なんだって？」

聴き手 「墮天は...しない...。」

ナナリー「どういう事だ？」

聴き手 「墮天はしない。人間に墮ちるだけだよ。」

ナナリー「はあ？」

ちょ、待て待て待てつ。

それ...マジか...？」

人間になるって事だろ...？」

聴き手 「ああ。

そして終わらせる。

僕の役目を。」

ナナリー「役目？大天使としてのか？」

聴き手 「そうだよ。もう終わりにしたい。

種族間のいざこざは、いつの時代も些細で愚かな理由で無くなりはしない。

もう見飽きた。

いや、見限ったと言った方が正しいかな。

領地の侵害、容姿の偏見、幼稚な殺戮。

ナナリーはごくりと息を飲んだ。

聴き手 「寿命を持たない僕は、嫌と言う程見てきた。

もううんざりなんだ。

所が人間と来たらどうだ。

異種族の事など知りもしなければ、争う事もない。

素晴らしい事じゃないかい？

そこで思ったんだ。

今後永遠に異種族間の争いをただただ傍観するのは、もう嫌だ、ってね。

僕が何年生きているか知っているかい？」

ナナリー「分かんねえ...。」

聴き手 「2000年だ。

2000年間、君達...いや、ダークエルフが誕生するそれ以前から見てきた。

その間、一体いくつの命が消えていくのを見たと思う？

はて...？僕自身ももう覚えていないな...？

数えるのも嫌になる程、そういう場面を見てきたんだ。」

ナナリー「それが嫌で、人間に？」

そもそも、あの実を食った所で人間になれるって保障はあんのかよ？」

聴き手 「さあ、どうだろう。

もう時期分かるさ。」

ナナリー「はあ？確証もねえのに、あの実を食ったのかよ...。」

気が付くと僕から放たれていた光は、次第に小さくなり始めていた。

ナナリーもそれに気が付いたのか、先程より安心した様な表情をしている。

聴き手 「あのさ、ナナリー。

僕が人間になれたのかどうか、見届けてくれないかな？」

ナナリー「見届けるつつても、どうすりゃいいんだよ？」

聴き手 「特別な事はしなくていいよ。

今までと一緒に、傍に居て欲しいんだ。」

ナナリー「は、はあ？ 何恥ずかしい事いってんのさっ！」

聴き手 「ナナリーは僕の事、好きって言ってくれたよね？」

あれは本当に演技だったのかな？

ダークエルフが異種族に、好意を示すだなんて、普通はあり得ない。

どうかな？ 本当の事を教えてくれないか？」

ナナリー「それは…その…。

あん時はそういう雰囲気だったつづ一か、流れ的につづ一か…。

初めての想い人が異種族でも構わぬかなって思って…。

ほら、ナナっちは森を追放された身だし？

万が一、帰れねえってなった時に、この世界で生きていく最終手段…的な？

そう。そういう意味で異種族を好きになるつづ一のは、こういう事なのかな？

って思っただけ。

それだけ…。」

聴き手 「ナナリー、よく聞いて欲しい。」

僕はね、君が好きだよ。

人間になる前提でこの世界に居た訳じゃない。

初めて会ったあの朝、君を視界に捉えたあの瞬間、僕は… そう、恋に墮ちた。

それは決して実らぬ恋だった。

何たって僕は大天使、君はダークエルフだったんだから。

当たり前だけど、異種族間の交際は御法度だ。

そんな事、僕が誰よりも知っている。」

湿度が高いせいか、重たい空気が全身に纏わり着いているような心地がした。

聴き手 「そして君から香ったエデンの香り…。」

“君はあの場所に立ち入り、エデンを持ち帰った身だと気付いた”」

ナナリー「え？ どういう…つまり、初めて会ったあの朝、既にこうなる事を…。」

聴き手 「ああ、そうだよ。」

もっとも、こうなるためには多少の運も必要だったけれど。」

ナナリー「運...？そんな賭けみてえな事、よく出来たな....。

もしナナっちが知らずにあんたを手にかけちまつたら...。」

聴き手 「言っただろ？運が必要だって。」

必要なら補えばいいんだよ。」

ナナリー「まさか...、同じクラスになったのも、隣りの席になったのも、

映画の後の店で一つだけ席が空いてたのも全部...。」

聴き手 「一つ忘れてる。」

ナナリー「何をだよ？」

聴き手 「あの朝、君の登校初日。」

歩行者信号が目前で赤に替わったのは、果たして偶然かな？」

ナナリー「！？」

おい...、おいおいおいっ！

そっからかよっ！」

聴き手 「やはり、気付いてなかったみたいだね。」

ナナリー「気付くワケねえだろ、んなもんっ！」

くっそ、どうなってやがる...。

...。

.....。

そうか....。

時間操作だな...？」

流石というか、納得というか、この子は頭の回転が早い。

もう答えを導き出してしまった。

聴き手 「そう、正解。」

僕はね、あの朝君がエデンを持っていると知って、

大規模な時間操作魔法を使ったんだ。」

ナナリー「成程...そりゃ気付くワケねえわ...。」

大天使の高等魔法なんて、見た事ねえんだもん。」

聴き手 「多分、見たらガッカリするんじゃないかな？」

かなりの範囲に時間操作を適用したから、魔法陣を書くしかなかった。

魔法を発動するために魔法陣だなんて、今時あり得ない。

まあでも急いでいたからね。

ああするしかなかった。

もっとも、魔力を使い過ぎたせいか、強い眠気に襲われたけれど。」

そこでふと言い忘れていた事を思い出した。

聴き手 「僕から放たれているこの光だけれど、これは本来の在り方なんだ。」

ナナリー「言ってる意味がよく分かんねえんだけど？」

聴き手 「分らないかな？」

ナナリー、君は闇魔法で幻覚作用を引き起こすことが出来る。」

ナナリー「ああ、そうだよ。」

今更何さ。それとこの光がどう関係して...。」

どうやら気付いた様だ。

ナナリーはうめき声を上げながら天を仰いだ。

ナナリー「そういう事か...。」

ナナっちの闇魔法を上書き出来る程の上位の幻覚魔法だな？」

聴き手 「ご名答。」

本来、大天使たる僕からは常に光が放たれてる。

それを幻覚作用のある高等魔法で見えていないと認識させていたんだ。」

ナナリー「所が木の実...エデンを食って、精神状態が乱れた。」

んで、幻覚作用が解け、本来の姿が見えかかってんだな？」

聴き手 「流石だね。頭の回転の早い子は好きだ。」

ナナリー「バッカ…今は関係ねえだろっ！」

それよりもさ、光が段々弱くなつてつけど、大丈夫なのか？」

何だかんだ言って、ナナリーは優しい。

真実を知り、その上で危険を顧みず僕の心配をしている。

やはり好きだ。

大天使であった僕が、異種族に好意を抱くなんて。

純愛小説が一つ書けそうだ、と心の中で笑った。

ナナリー「おい、聞いてんのか？」

「大丈夫なのかつってんの。」

聴き手 「ああ、大丈夫。」

「これは僕が徐々に人間へと変異していっている証さ。」

「もう間もなく僕は完全に大天使ではなくなる。」

不安そうだったナナリーの表情がまた緩む。

ナナリー「ったく、信じらんねえ…。」

「大天使、神の直属であるあんたが、それを放棄するんだもん。」

「そんなん誰が予想出来つかよ…。」

聴き手 「ははっ…。」

「確かに愚かな行為かもしれないね。」

「不死を捨て、魔力を捨て、天界をも捨て…。」

「その上、下位の種族、人間になろうって言うんだもんね。」

ナナリー「大天使から人間になるつーのは、すべての「ちから」を失うんだな？」

聴き手 「うん。」

ナナリー「本当にそれでいいのか？」

聴き手 「うん。」

ナナリー「禁域の管理は？あんたの代わりは？この世界に他の種族が攻めて来ねえか？」

聴き手 「大丈夫だよ。禁域は閉じる。」

ナナリー「閉じる？」

「どういう意味だよ。」

聴き手 「言ったろう？繋がっているって。」

「あの場所はね、異種族間の世界に移動できる“扉”なんだ。」

ナナリー「お、おう。」

「それは何となく分かる。」

「けどそんなヤベエ事、喋っちまっていいのか？」

聴き手 「もううんざりなんだ。」

「いや、大天使ではなくなつた今なら、こう言うかな？」

「クソ喰らえってね。」

ナナリー「お、いいね。」

「確かに大天使様ならそんな乱暴な言葉は使わねえ。」

それまでの緊張が一気に解けた。

と共に、身体から「ちから」が抜けていくのが手に取る様に分かった。

もうそろそろタイムリミットか。

ナナリー「んで？“扉”を閉じるつっても、どうすんだ？」

聴き手 「僕の残った魔力をすべて使って、“扉”を破壊する。」

ナナリー「わお、過激じゃん。」

聴き手 「まあね。」

「もう「ちから」が失われかけてる。」

始めるから、ナナリーは少し下がってて。」

言われたナナリーが素直に2,3歩、大きく後ずさりした。

ナナリー「こんくらいでいいか？」

聴き手 「ああ、問題ない。」

心を落ち着かせ、集中する。

どんよりと湿度の感じられる周囲の空気が、一瞬にして氷の粒となった。

それらは月明かりに照らされ、キラキラと輝き、まるで宝石を連想させた。

次に氷の粒を一点に集中させ、巨大な氷塊をイメージする。

氷塊はみるみるうちに成長し、あっという間に展望台の上空を埋め尽くした。

ナナリーはポカンと口を開いたまま立ち尽くしていた。

まあ無理もない。

僕の奥の手。

最大の威力を誇る魔法だ。

もっとも、人間に移り変わっている今、本来の威力ではないだろうけど。

それでも“扉”を破壊するだけの余力はある。

さあ、すべてを終わらせよう。

聴き手 「ジ・エンド・オブ・ゼロ。」

魔法を行使した。

もう後戻りはできない。

が、内心は晴れやかな気分だった。

当たり前だ。

ようやくこの時が来たんだ。

巨大な氷塊は天へと昇り、瞬く間に遙か上空へと到達した。

順調だ。

僕は手を降り下ろした。

氷塊は7等分に割れ、1つを残して上空から消えた。

残された1つの欠片はもの凄い速度で西の空へと消えていった。

さて、あとは着弾を待つだけだ。

最も早く着弾するのは、どうやら人間界の様だ。

5、4、3、2、1、0....。

着弾を確認。

と同時に氷塊を数千度まで熱する。

膨れ上がった蒸気は、人間界の禁域を跡形もなく吹き飛ばした。

所謂水蒸気爆発だ。

続いて天使族、悪魔族、ダークエルフ族、エルフ族、オーク族、ドワーフ族。

次々と着弾し、すべての禁域が破壊された。

終わった。

魔力を使い果たした僕は、その場にへたり込んだ。

ナナリー「おい、大丈夫か？」

もう終わったんだよな？」

聴き手 「うん...これでもう...僕は自由だ....。」

ナナリーが駆け寄ってくると、肩に手を回し、ベンチまで連れて行ってくれた。

聴き手 「ありがとう。助かったよ。」

ナナリー「いや、それはいいけどよ....。」

あんなとんでもねえ魔法、見た事ねえぞ....。」

高等魔法、ハンパねえな....。」

あんたと魔法でやり合おうなんて思わなくて正解だったわ....。」

聴き手 「あはは....。怖がらせちゃったかな？」

でももう僕には魔力は残っていないし、今後は使えない。」

ナナリー「そつか....。人間になるんだもんな....。」

なあ、人間になるって怖くねえの？

寿命は短い、身体は弱い、心も脆弱なんだぞ。」

聴き手 「それがいいんじゃないか。」

終わりのない命なんて、貧乏くじを引いたようなもんだ。」

でもこれで、ようやく終わらせられる。」

ナナリー「人間として生きていくんだな？」

聴き手 「うん。」

ナナリー「じゃあさ、ナナっちの話、少し聞いてくんねえ？」

聴き手 「聞こうか。」

ナナリー「さっきさ、あんたを好きってのは演技つつたじゃん？」

聴き手 「うん。」

ナナリー「あれ、嘘...。」

聴き手 「へえ、嬉しいね。

つまり僕に好意を抱いているって事で合ってるかな？」

ナナリー「お、おう。そうだよ...。」

聴き手 「どうして今、その話を？」

ナナリー「たった三日。

この短い期間に色々と教えてもらつただろ？

んで、まだまだ君に聞きてえ事が山ほどあんだ。」

聴き手 「勉強熱心だね。」

ナナリー「そうじゃねえってっ！

その...要するに...あんたの傍に居たいんだわ...。」

聴き手 「驚いた。

人間である僕に寄り添う...そう言うのかい？」

ナナリー「そうだよ...。」

聴き手 「ナナリー、君は一つ大事な事を忘れていないか？」

僕は人間、君はダークエルフだ。」

ナナリー「んなこと分かってんよ...。

でな？ナナっち、考えた。

いや、選択したつづ一方が正しいか。」

聴き手 「選択って何を？」

ナナリー「これだよ。」

そう言うとナナリーは握った拳を突き出し、ゆっくりと広げた。

手の平にあるそれはエデンだった。

聴き手 「それは...さっき僕が吐きだしたエデン...。」

それをどうしようっていうんだい？」

もう予測はついていた。

ナナリー「分かってる癖に...。こうすんだよ。」

慌てて駆け寄ろうとするも、まだ身体の自由が利かない。

必死に手を伸ばすも届かず、虚しく空を切った。

そしてナナリーはエデンを口に含んだ。

迷う事無く。

ナナリー「へえ、もっと不味いもんだと思ってたけど、そうでもねえな。」

そう言っている内に、ナナリーは青黒い光を放ち始めた。

と同時にナナリーはその場に倒れ込んだ。

翌朝

僕はベンチでうずくまっていた。

すると視界の端から、ヌッと顔が現れる。

逆光で顔が見えない。

だがその輪郭には見覚えがあった。

“ナナリーだ”

そして聞き覚えのある声が僕に投げかけられる。

ナナリー「あー、起きた起きた♪

叩いても搖すっても全然起きねえんだもん、焦ったわー。

ほーら、早く学校行かないと怒られっぞー。」

そう言うとナナリーは手を差し出した。

綺麗に整えられた爪が目に入る。

僕はその手を強く握った。

ナナリーにグイっと引っ張られ立ち上ると、ようやく顔を認識出来た。

真っ直ぐ伸びた銀髪。

程よく焼けた肌。

耳は...相変わらず可愛い形をしている。

聴き手 「朝になっちゃったか。」

ナナリー「朝って時間でもねえけどな。ほら。」

そう言うとナナリーはスマホの画面を僕に向かえた。

10時33分。

もう2限目が始まっている時間だ。

聴き手 「マズいな...大遅刻だ。」

学校へ行くにも、着替えと荷物が必要だ。

急いで帰る支度を始めたところで、ふとこう思った。

聴き手 「サボろうかな。」

どうやら無意識の内に、口に出してしまっていた様だ。

ナナリー「お、イイねっ！ナナっちも同じ事考えてた♪

どっか遊びに行こうぜっ♪」

眩い光を放つ太陽を背に、僕達は展望台を後にした。

生温かい風が吹き、地面に落ちていた木の実が霧散した。 FIN